

荒木山通信

2023年4月

第17号

北房文化遺産
保存会

令和五年度も
取り組みます

荒木山西塚古墳の発掘
調査・西の明日香村
ガイド養成事業

一月二十八日（土）、北房
文化センターで、令和五年
度の北房文化遺産保存会総
会が開催されました。



令和四年度の事業と決算

・監査報告の後、五年度の
事業計画や予算・会則の一
部変更等について話し合い
ました。

《事業計画》

(一)荒木山西塚古墳の発掘調
査について

二月一七日からの調査で
も発掘及び一般参加者の
世話を。秋の二年次調査
にも全員で取り組む。古
墳の清掃（柴掻き）も。
(二)西の明日香村ガイド養成
事業について

作成したテキストを用い
ての研修講座の開催

(三)会員活動用ベストの作製
(四)広報紙「荒木山通信」の
発行（四・八・十一月）

(五)文化遺産に係るクラウド
ファンディングの研究

《会則の一部変更》

・事務所を文化センター
内に。

・会費を大学生千円、高
校生以下五百円。

また、役員改選も行われ
ました。会の発足以来、熱
い思いと高い識見で導いて
こられた久松会長・戸村顧
問が退かれました。長い間、
大変お世話になりました。

令和五年度役員

会長 畦田 正博（新）

副会長 奥田 健治

顧問 久松 秀雄（新）

同 平井 典子（新）

幹事 井原 隆志

同 宮田 美輝

同 山崎 和光

同 三浦 明

同 大植 昭一

同 原田 重隆

同 三輪 能章

同 梶上 守

同 上谷 仁志

同 平城 元

同 小林 展弘

同 志田 浩一

同 南條 保之

同 黒田 秀男

（新）新役員

以上一八名の体制です。

よろしく願いいたします。

北房地域における文化遺産

を次世代に継承するため、

五年度も保存・活用・研究
に取り組みます。

【総会以降現在までの活動】

○荒木山西塚古墳

令和四年度後期発掘調査

発掘調査準備

二月五日（水）

発掘調査

二月一七日（金）

三月一二日（日）



現地説明会

三月四日（土）

晴天にも恵まれ県内各
地から約一三〇名の参加
がありました。（県外か
らの参加者も）スタッフ
として説明や案内等、会
員の皆様には大変お世話
になりました。

説明会の数日前には、
見計らったように丸底壺
や長頸壺なども出土しま
した。また、地域の特産



品販売の売店などもあ
り、会を盛り上げまし
た。後でその様子がM
ITなどで放映されま
した。



【出土の長頸壺】

真庭市や市教育委員会、
大学（同志社大・駒澤大）、
専門家の先生方のご支援・
ご指導、そして本会会員や
一般参加の方の熱意、ご協
力、地権者のご理解により
令和四年度の発掘調査をつ
つがなく終えることができました。
心より感謝申し上げます。

げます。

この秋には二年次の調査も計画されています。

宜しくお願い致します。



(畦田)

○ガイド用テキスト

三月一日(水)発行。
A4・五〇頁。

北房文化遺産ガイド用テキスト



北房文化遺産保存会

○会員活動用ベスト

保存会員に

無料配布。会でのイベントなどで着用します。

(三月四日の現地説明会の時にも着用しました。)



北房の文化財や史跡を載せており、史跡の案内等に活用したいと思います。

特別寄稿

土井2号墳から出土したイヌの骨

元津山市教育委員会生涯学習部長

行田裕美

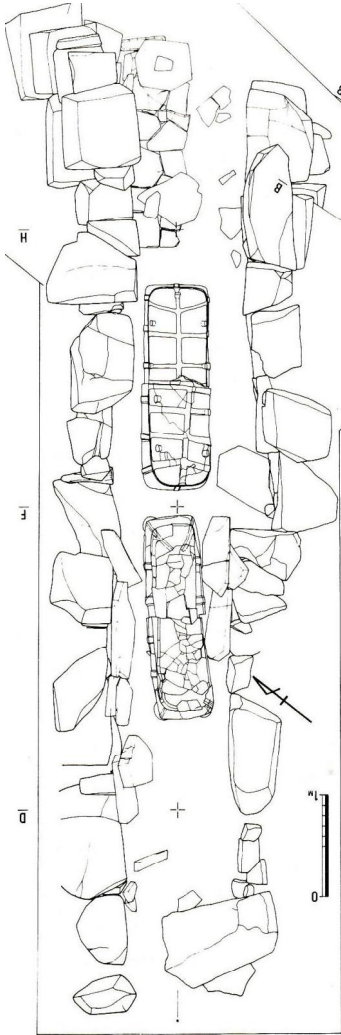
土井2号墳の石室からは二基の陶棺が出土した。石室の奥側を1号陶棺、手前側を2号陶棺と命名された。ここで取り上げるイヌの骨は1号陶棺の下から出土した。陶棺の下と言っても土管状の脚が沢山付いている。イヌの骨は、その脚と脚の間に須恵器等と一緒に詰め込まれたような状態で出土した。何故わざわざ陶棺の脚と脚との間に詰め込んだのであろうか。

横穴式石室は追葬のため造られた墓である。土井2号墳は出土した須恵器の年代から約一〇〇年間にわたり使用されていた。その

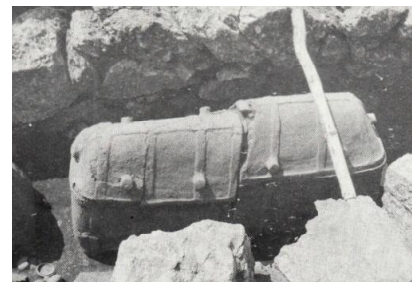
間に詰め込んで、追葬陶棺のスペースを作るのである。このように、陶棺の脚と脚の間にびっしり須恵器等を詰め込む風習は、陶棺を複数持つ古墳では普遍的にみられる現象である。従って、陶棺の下須恵器類が追葬時のものよりも確実に古いのである。

イヌの骨は1号陶棺下の脚と脚の間から出土している。1号陶棺の被葬者と関係するものと考えられる。では何故イヌの骨が古墳から出土するのだろうか。

イヌの骨は頭蓋骨と下顎骨だけで胴体部や胸部の骨は見られなかった。このことから調査を担当された京都大学の池田次郎先生は、「白骨化した頭骨だけを入れたのだろう」と推測されている。



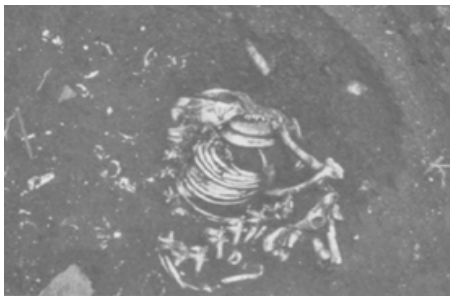
【土井2号墳平面図】



【1号陶棺出土状況(土井2号墳)】

時代は遡るが、縄文時代の食生活を覗いてみよう。縄文時代になると狩猟採集に加えて漁労活動が大きなウエイトを占める。食した後の獣骨、貝殻、魚の骨などは不要なため、一定の場所に集積される。それが貝塚と呼ばれるごみ捨て場である。従って、貝塚の調査をすれば縄文人が何を食べていたのかがつぶさに分かる。

各地の貝塚等の調査結果から、縄文人が口にしていた哺乳類はイノシシ・シカを始めサルも含めて七〇種に及ぶ。鳥類はガン・カモ類を始め三五種。水産物としては、魚類七一種、貝類三五種、エビ・カニ類八種、ウニ類三種があげられる。これらの中には、毒のある



【イヌの埋葬（宮城県田柄貝塚）】

フグ、クジラ、アザラシ、オットセイ、イルカなども含まれている。また、アマモなどの海藻類一九種も確認されている。

植物食としては、クルミ、トチ、クリ、ドングリ、シイなどの堅果類が中心である。トチやドングリなどをアク抜きしたと考えられる貯蔵穴も見つかっている。

さらに、最近の調査でダイズ、アズキ、エゴマ、ヒヨウタンなどの栽培種が見られ、縄文人が菜園を営んでいたことも明らかになってきた。こうしてみると、縄文人は現代人よりも実に多くの食材を口にしていたようである。逆に言えば、食べられるものは何でも食べていたと言え

るかも知れない。しかし、イヌを食べた痕跡だけは見つかっていないのである。つまり、縄文人はあらゆる哺乳類の中でイヌだけは食べていないのである。

イヌはイノシシやシカなどの狩猟のために猟犬として飼育された縄文時代唯一の動物だったのである。イヌの埋葬例は全国で約一二〇例が確認されている。そして、イヌは縄文人の墓域内に埋葬されているのである。イヌは縄文人の伴侶であり、生活を共にしていた家族同様の存在であったのである。このため、死後はごみ捨て場である貝塚に捨てるのではなく、宮城県田柄貝塚の例のように丁寧に埋葬されたのである。

イヌと共存した縄文時代がそのまま古墳時代に当てはまるとは思わないが、1号陶棺被葬者とイヌとの関係の謎を解くための手掛かりの参考になればと思う。

（二〇二二・一二・二二脱稿）

※ 土井2号墳関係の平面図や写真は「土井2号古墳」

（北房町教育委員会、一九七九年三月発行）より

【創作民話】

奥吉備の里

備中中津井の桃太郎物語

中嶋ひろし

飛鳥時代大和政権は統一国家の実現にあたり、吉備の国は鬼ノ城にあって鬼と恐れられる権力者を屈服させよとの命令を下した。

近江出身の石川王は「日本一」の旗印を掲げ進軍、中津井は高機山のふもと近江川原に駐留した。古くから畿内政権と密接な関係にある在地の三豪族が出迎えるのであった。

その一人は忠誠心が強く武勇に優れた土井の豪族で犬が大好きである。定の豪

族は首長格で地勢に明るく知恵者で猿と呼ばれていた。清常の豪族は雉のように広い視野を持ち、弓矢を得意とする勇敢な人物である。絶大なる信頼関係の中、平定後の国造りの協力推進についても話し合い、いざ出発！

愛称の犬、猿、雉は近江軍と共に鬼ノ城に攻め上る。持ち前の力量を存分に發揮し、大した戦乱もなく退治することができた。天皇は



大いに喜ばれ、それぞれにご褒美を授け、そして石川王を吉備の大宰に任命し新しい国造りを急がせた。

石川王は、都から邪気を払い、また不老長寿の薬と言われる桃の実を持ち込んだ。人々は大変に喜び、尊敬の念をもって桃太郎さんと呼ぶのであった。

時は流れ、大宰石川王の訃報に天皇は深く哀しまれ、その功績に諸王二位を贈られた。桃太郎のお墓は、安住の地中津井に極めて立派な古墳が造築され、安らかな眠りにについている。悠久の里、中津井のロマンは奥深く広い。

特別寄稿

「備中と道」の紹介（その4）

備中と道推進協議会 顧問 森山上志

金屋小路の常夜燈には次の解説（要旨）があった。

- ・成羽町陣屋町常夜燈
- ・成羽町指定史跡
- ・平成十三年四月一日指定
- ・文政十一（一八一八）年建
- ・金毘羅大権現を祀る
- ・町の安全を守る常夜燈



【金屋小路の常夜燈と小祠】

大神宮と玉垣

大通りの中程には大神宮の額を掲げた鳥居がある。これは、かつて伊勢神宮の分社と云われていたからである。明治維新後は山田神社と改称されている。

境内の玉垣に安政四（一八五七）年当時、阿波、九州、大坂などの舟問屋の名前が刻字されている。これは成羽が川港として繁栄していた史実を物語っている。



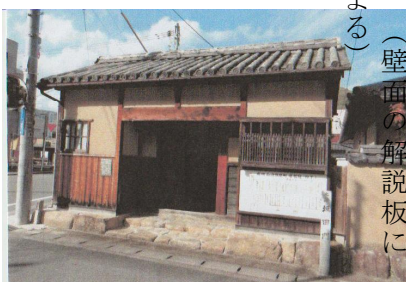
【大曲がり】

成羽藩勘定所遺構
大通りは城下町らしく「大曲がり」が二カ所遺されておき、初めの折れ曲がりには恵比寿神社が祀られていた。次の角には、長屋門を持つ成羽藩勘定所遺構がある。勘定所は、年貢米の管理、高瀬舟の運行や運上金の管理等をする重要な役所であった。
成羽の領主山崎豊治公が



【大神宮の鳥居】

成羽以北の広域の後背地から人や物が押し寄せていた時代の繁栄の様が、現在の長い商店街の跡からも容易に推測できる。
この通りを明治の末期から大正の初めにかけて魚仲仕達が、魚籠を担いで走り抜けていたのである。ここから吹屋の区間を運ぶ中仕達に魚籠を渡していた引継ぎ場所が、まだ特定されていない。
鮮魚店の広告(引き札)
商店街の中心であった本



【成羽藩勘定所遺構】

万治元(一六五八)年に入部され、商人の町「新町」を作り、商売繁盛を願い恵比寿様を勧請した。高瀬舟による物資の集散を薦めた町作りが明治維新後も継続されてきた。
(壁面の解説板による)

丁には「神楽による町おこし」を願い、陶器製の神楽のオブジェが町筋に展示されている。
そのオブジェを楽しみながら西に進むと、本丁の西端近くに鮮魚店がある。
そこには古い広告(引き札)と明治期のお得意様に宛てた請求書が展示されている。お得意様の名前から宇治方面にも取引先があつたことが伺える。五代目当主の話によると、現在も宇治や吹屋に鮮魚を販売に行くそうである。
かつての」とと道は本丁の西端の十字路を右折して総門橋を渡っていたが「平成の」とと道は左折して山崎家御殿跡(成羽美術館)に立ち寄ることになっている。



【明治期の引き札】

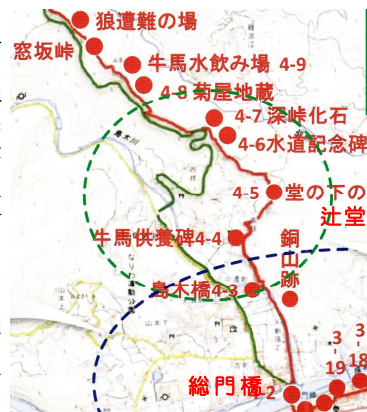
4 成羽(御殿屋敷) ↓ 吹屋

① 成羽ー窓坂峠北に至る

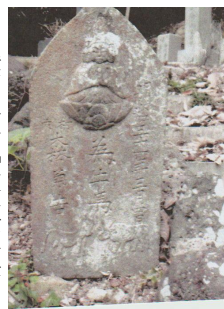
とと道

「吹屋往来」は、広島県東城の鉄や薪炭、吹屋の銅や弁柄等を成羽へ運び、高瀬舟で成羽へ運ばれた肥料(魚粉)や生活必需品、吹屋銅山で働く人夫の食材等を吹屋や東城へ輸送する路線であつた。一方、江戸期には新見藩主が参勤交代の帰路に成羽からこの往来を利用することがあつた。

成羽↓吹屋の」とと道もこの往来を活用していた。平成時代になり広域農道の設置により吹屋往来は分断され、とと道が判別できない箇所へは私どもが案内板を立てている。
成羽美術館(御殿屋敷跡)の石垣(野面積み)を見た後は、魚仲仕が通っていた総門橋を渡る。橋の北詰めの左岸を少し川上に進むと、高瀬舟が発着していたことを物語る「常夜燈」(川港の灯台)が遺されている。
とと道は、島木橋を渡り東枝地区へ向かう。坂道を少し上った分かれ道の角に



牛馬供養塔(牛と馬の彫刻)がある。この坂道を牛や馬と共に苦勞して山越えした昔が偲ばれる。とと道は右手の道を上る。



【牛馬供養塔】
明治31(1898)年建立

案内板「吹屋往来・とと道」に従って少し上ると平坦になった所に「水道記念碑」がある。「長さ七・一五間・人夫二〇〇人」との刻字から集落の人々の労力で生活用水を確保したことが分かる。
平坦な部分を道なりに進むと広域農道と合流する。
窓坂峠
しばらく舗装道路を進み右手の山道に入り、窓坂峠

へ向けて山道を上る。「菊屋地蔵」の案内板の脇に菊屋佐治郎と刻字された地蔵尊が祀られている。



【「菊屋地蔵」・案内板】

さらに上ると牛馬水飲み場と番所跡の案内板がある。急坂を登り切った山頂あたりが「窓坂」と呼ばれている。後ろを振り返ると成羽の町が展望できる。前方にはぼつかりと空いた空間が窓のように見える。



【窓坂峠】

地元の人々が「窓坂峠」と呼ぶようになったという。

とと道は昭和二五（一九五〇）年頃から通行しなくなり、松枯れ病による倒木や笹類の繁茂により通行不可になっていた。

地元のT氏が自ら重機を使い数年かかってかつてのとと道を復元された。この奉仕作業により「とと道」が再び通行可能となった。

② 窓坂峠北ー宇治に至る とと道

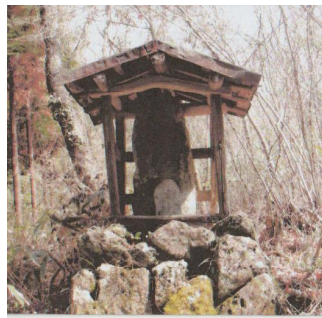
「とと道」案内表示に従い、「宇治への山道」へ入る。ここから宇治町後谷地区まで人家は無い。山道は平坦で普通車が通行できるくらいの幅員がある。しばらく進むと高圧線管



【宇治への山道】

理道と交差する。そこから少し進むと左手に捨てられた廃車があり、その廃車に「とと道」案内が記入されている。

案内板に従い右に進む。次の交差点を左に進むと笹が自生する狭い山道になる。山道の右手に屋根を付けた大きな地蔵尊（建立年不明）が祀られている。その前に置かれた石仏には文化十年（一八一三）の刻字が見える。その頃、既にこの山道を通行していたことが判る。



【屋根付きの地蔵尊】

少し進むと道標と石仏があり、その道標の刻字に驚いた。
・右 なりハ道 一り半
・左 まつやま 二り半
詳しい行き先案内である。側面には「北谷屋」とある。次の地神を過ぎると、後谷地区の集落が見えてくる。
(以下、次号へ)

古墳の山城への改造

津山おくにじまん研究会

代表 赤坂健太郎

「荒木山通信」に初めて寄稿させていただきました。赤坂と申します。よろしくお願ひ致します。

十一月末に初めて古墳を訪れ、発掘調査に参加してきました。予想以上の古墳の大きさに驚きつつ、未知の歴史が解明されるかも知れないそのプロジェクトに関わっているということに嬉しく思っています。

さて、現在発掘中の荒木山西塚古墳の東側には荒木山東塚古墳が存在しています。この古墳は、全長四五mの前方後方墳ということが明らかとなっています。その古墳が造営されて、千数百年経った中世のある時期に山城として改造されています。特に墳丘の南側斜面と北側斜面にその造作がなされているようです。二〇二〇年に岡山県教育委員会

が発刊した「岡山県中世城館跡総合調査報告書第2冊 備中編」には「荒木山東塚城跡」として記載されています。

それによると、「古墳の後方部を二〇m×一五m前後の本丸ともいふべき主郭としており、前方部を長さ一五m、幅一〇mの曲輪として使用。曲輪の先端部は古墳の墳形が撥形に開いていて、前方後方墳としての名残はよく留められている。さらには主郭の南東側には幅一五〜二〇mほどの曲輪を形成。そして、それらの周りを二〜五mを測る帯曲輪で囲んでいる。古墳の前方部前面には、高さ一・五m



【荒木山東塚城跡縄張り図】

県中世城館跡総合調査報告書一備中編一

と1mを測る二重の土塁、深さ一・五mの堀切によって古墳が立地する尾根を遮断して守りを固めていたものと考えられる」ということが述べられています。

こうした改造した例というものはよくあるもので、県内では最近岡山市内で発掘調査された国内第四位の規模をもつ前方後円墳、造山古墳があります。後円部を削り出し、周囲に土塁を構築しています。建物跡の一部と見られる柱穴が発見されています。

美作地区周辺では、津山市二宮の美和山1号墳、上横野の小丸山古墳、戸島の局笠山古墳、真庭市美甘の陣山城跡、鏡野町貞永寺の春日城跡などで改造例が挙げられます。特に美和山1号墳は美作地区最大級、全長八〇mの前方後円墳で、後円部を大きく削り出し、その南端に土塁を構築、墳丘の両端にも二・五mほどの大規模な土塁を築いているというものです。

こうした古墳を城として改造するということは岡山県内周辺、全国的にもよく見られるものです。城を築

く時にそこにたまたまある大きな古墳にそのまま段差をつけたり整形加工をしています。当時は古墳としての認識はなく、小高い丘のようなものと考えていたと思われる、これを城として活用するには都合がよく、次第に城改造への動きが全国的に広がったようです。見張り台、狼煙台にするなどして、二次的に利用していたものと思われまます。

(二〇二一・一二月 記)

《俳句・短歌コーナー》

- 泥水で遺物を洗ふ
北おろし
- 古墳掘る忽ちにして
冬の土
- 雲海のロマンあふるる
荒木山
- こつこつと発掘の背や
返り花
- 土削り運ぶ篩へ黙々と
やがて戻さん

古墳の眠り
畦田恵子

伝承される草薙剣

古代の剣 その1

戸村 彰孝



昨秋の北房文化交流祭、ドームの舞台で備中神楽が高梁城南高校生によって上演された。素戔鳴尊の八岐大蛇退治の勇壮な剣舞に拍手が鳴り止まなかった。

あの大蛇の尾からとり出した天叢雲剣は、その後二千年以上たつが、どうなっているのだろうか？ 皇位の標識として歴代の天皇

が受け継いできたという八咫鏡・天叢雲剣・八咫瓊曲玉の三種の神器は、現天皇の踐祚の令和元年五月一日、剣璽承継の儀でも登

場した。

しかし、私は考えた。平安時代の末、瀬戸内海の壇ノ浦で源平の最後の決戦があった。確かあの時、剣は七歳の幼帝安德天皇と共に海底深く沈み遂に竜神の守り刀となったと伝えられたのだが、念のため平家物語を開いた。

『先帝身投』の段。二位殿曲玉をわきにはさみ、宝剣を腰にさし主上をいだきたてまつつて……浪のしたにも都のさぶらふぞ、となぐさめたてまつりて、千尋の底へぞ入り給ふ。」

(一) その記録をざらにたてた。素戔鳴尊は出雲の国で

奇稲田媛を助けるため八岐大蛇を退治し、その尾から霊剣をとり出し、姉の天照大神に献上した。その後、瓊杵尊の天孫降臨に際し三種神器として下賜された。

(二) 古墳時代が始まる三世紀、第十代崇神天皇の代のこと。神器の鏡や剣との同床共殿(同居のこと)を畏み、剣と鏡を笠縫邑に小さな宮をつくって祭った。その代りに護身用の剣と鏡を鑄造させて宮中に奉安した。

(三) 歌の垂仁天皇は、神のお告を受けて、伊勢国の五十鈴川の上流に神宮を建て斎宮の制度をつくって天照伝来の剣を祀った。

(四) 次の十二代景行天皇は子の日本武尊に九州に次いで東国の征討を命じた。この時、吉備津彦が側近として従軍した。尊は東征に際し、叔母が斎主であった伊勢神宮に別れを告げるため立ちより、饞に天叢雲剣と火打石の入った小袋を頂いた。敵の火攻めに合った時、その剣で周囲の草を薙いで迎火を放ち勝利するこ



【高梁城南高校生の素戔鳴尊】



【日本武尊の銅像】

「地図と地形で読む古事記」より

とができた。以後、草薙劍くさなぎのつるぎという。

帰途、伊吹山の神に崇たたられて非業の死を遂げ白鳥となって大和の都の方へ飛び去った。残された劍は妻の宮實媛みやさひめから尾張の熱田神社に奉獻された。

(五) この劍は神靈の宿るところを顕す事件が第三十八代の天智・次の天武天皇の代におこる。天智七年の日本書紀「是歳、沙門道行（新羅出身と伝える）草薙劍を盗みて新羅に逃げ向く。而して中路に風雨とあひて、まどいて帰る。」この盗難事件の再発をおそれた天皇は、劍の所管を熱田神宮から近江の宮中に移した。

(六) 壬申の乱で大友皇子を倒して政權を握った天武天皇も不死身ではなかった。病床に伏した朱鳥元（六八六）年六月十日、病の回復を占うに、「草薙

劍に崇れり」と出た。天皇は即日、劍を熱田の宮へ送り置くことを命じた。

(2) 熱田神宮の祭神「草薙劍」は明治天皇によって封印され、大正天皇も昭和天皇も開封されず、その刀影を拝見した者は一人も居ない。

こうして私の謎は解けた。

(1) 天皇の歴史から言えば異常な南北朝時代、後醍醐天皇即位の時も三種神器は用いられた。南朝が奉持していた三種神器は將軍足利義満の時、北朝に奉還され和解統一の証とされた。（神皇正統記）

令和天皇踐祚の劍は複製で御世器という。

（熱田神宮の話）

(3) 神話に登場する神々が帯びた劍は、刀劍やいばの長さによって、十握劍じゅうかくけん、九握劍くかくけんなどと表記され、素戔鳴尊が使った劍は十握劍

で天羽々斬あまのはざりという。現代の考古学という土井二号墳出土の頭椎とか大谷一号墳の双龍環頭大刀というように柄の形状で分類するものでない。今後両者の照合が必要となるだろう。

西の明日香村コンソーシアムと

北房文化遺産の活用

平城 元（発掘担当）

荒木山西塚古墳第一次発掘作業が、事故や怪我などなく終了できたことに安堵しています。今回の後円部およびその周辺の発掘作業によって学べたこと、興味深かったことなどについて

は、機会があればまた書いてみたいと思いますが、ここでは改めて「西の明日香村コンソーシアム」の目的等について少し述べたいと思います。

今回の発掘調査において最も特徴的なことは、この体制にあります。そもそも、この体制が組まれた目的は、地域・大学・行政そして考古学等の専門家からなるサポーターが同事業体として

て一体となり、北房地域の文化遺産の調査・研究および保存・活用に係る取り組みを連携しながらおこなうことで、「西の明日香村づくり」を進めることにあります。

近年、文化遺産を博物館等で公開するといっただけの活用ではなく、地域振興等へ結びつける活用が望まれています。北房の文化遺産等を活かした地域づくり、「西の明日香村づくり」は、まさにそれにあたります。

したがって、今回の発掘調査自体も大変大きな事業ですが、一方で目標達成のためのワンステップであるともいえます。西塚古墳の



【古墳の埋め戻し作業】

発掘調査を適切に、かつ効果的に推進することによって得られた成果を、今後、地域住民も参画しながら、どのように活用し、例えば、全国の古代史ファンをはじめとした多くの人びとに、「西の明日香村」北房を知ってもらい、そして訪れてもらうようにしていくのかといったビジョン策定・推進が、より大きな目標であることを強調しておきたいと思います。

もちろん、今回のように発掘作業の段階から、地元の小・中学生、住民をはじめ県内の人びとを巻き込んで、古墳の学習と発掘作業をおこないながら、参加者同士の交流を図る活動そのものが、一つの効果的な活用でしょう。

ところで、当保存会では、

発掘調査開始に先立ち、真庭市北房振興局とも連携しながら、「西の明日香村づくり」のスタートとして、「西の明日香村・道しるべ整備事業」をおこなっています。本事業については何度か説明されていますので詳細は述べませんが、振興局と保存会で計二四基の道案内看板、そして「西の明日香村」のメイン散策道（山の辺の道）の入口案内看板三基の設置を完了しました。さらに、保存会が作成協力した散策マップ「北房史跡探訪ガイド&MAP」も完成したことで、誰もが比較的容易に目的の遺跡等に辿り着ける整備がかなり進捗しました。

そして昨年から、「西の明日香村・ガイド養成事業」を開始し、史跡等を巡る人びとを案内し、北房の文化遺産の魅力を伝えるガイドを養成していく計画です。そのガイド養成のための講習テキストを、真庭市教育委員会の補助金制度を活用し、完成したところで。この事業は、北房の文化遺産を活用できる多様な活動に繋がる可能性があります。

ます。

こうして、発掘調査と並行しながら「西の明日香村」北房への受け入れ態勢を整える事業を進めてきました。今後は、北房の情報を全国に向けて発信する事業も必要となります。

「西の明日香村コンソーシアム」が目標とする文化遺産を活かした地域づくりは、単に文化遺産だけでなく、それらを育む環境や景観、そして人的な交流・ネットワークも含めた総合的な保存・活用体制の構築が望ましいように思われます。今年の後半から再会される第二次発掘調査でも、「西の明日香村コンソーシアム」体制により、多くの人たちの交流の場になり、北房の史跡を一人でも多くの人に知ってもらえる場になることを期待し、北房をどんな「西の明日香村」にしたいのか考えていきたいと思います。



【作業後の集合写真】

荒木山西塚古墳発掘調査

一般参加者から

○ 一般参加者には、小・中高生の参加もあり、大人に交じって熱心に発掘作業に取り組んでいました。その中の二人から感想等を寄せてもらいました。

荒木山西塚古墳発掘に参加させてもらって

岡山市

坂東郁仁（小6）

僕は九歳から古墳にはまり、これまで県内外の古墳を延べ一五〇〇基以上巡っています。発掘調査の現地説明会には何度も参加してきましたが、古墳を発掘したのは今回が初めてでした。

昨年二月、北房での「西の明日香村歴史講演会 荒木山とその時代」に参加して松木武彦先生の講演をお聞きし、荒木山古墳をはじめとする北房の古墳群に興味を持ちました。北房で古墳巡りをし、荒木山東塚・西塚も訪れ、前方後方墳と前方後円墳が並んで築かれている様子に衝撃を受けました。荒木山古墳への関心が高まり、ついに荒木山西

塚古墳の発掘に参加させてもらうことができました。実際に墳丘を発掘すると、地山などの地層がとても良く分かりました。トレンチを掘り進め、自分の手で土器を掘り出したときは感動し、すごく嬉しかったです。

さらに古墳の築き方や土器について考察できたことも楽しい経験になりました。

荒木山古墳には、まだまだ多くの謎と宝が眠っていると思います。それらが紐解かれていくことを想像するとワクワクします。

これからも西の明日香村・北房の魅力ある文化財を全国の人々に広く知ってもらい、北房の地が盛り上がるっていいなと思います。



発掘調査に参加して

真庭市

森田陽介（中3）

僕は、十月にあったコスモス祭りで荒木山古墳の発

掘調査について知りました。小学生の頃に授業で北房の古墳について教えてもらったことがありました。その時から古墳に興味を持ったので、この発掘調査に参加しました。

発掘調査には二日間参加することができました。古墳を削る作業と、削った土をふるいにかけて出土器をさがす作業をすることができました。ふるいにかける作業は、出土器が土とよく似ていたため一緒に参加した方と悩みながら出土器っぽいものを分けていきました。残念ながら出土器を見つけたことはできず悔しかったですが、一緒に参加した方が土器のかげらを見つけて、本物の土器を見ることができました。

この発掘調査に参加し、地域の良さをまた一つ知ることができました。このような地域を盛り上げる活動に、また参加したいと思います。

※ 次号一八号は、八月末発行です。皆様からの投稿をお待ちしています。